

## 月面の観測について

荒木 健兒

大阪の伊達君と京郡の坂井君との御熱心さに動かされて誕生した月面課の事業を、遊星面観測に特別な技術を持つて居られる前田君に援助してもらふことにした。大體の観測方針について前田君から要求されたから、日食に出發前のあわただしい時間をさいて、文獻の調査も誠に粗末ではあるが、例をあげて次に記すこととする。

月面のどの部分を見たらいいかといふ問題については、流星や變光星の場合と同じく、變化が判明してゐる部分を調べることと、變化があるらしい部分を調べることと、これまで誰も變化を見てゐない部分を特に注意することとの3種の方針のいづれにも味方出来ない。各自の自信によつて進みたい。

観測に要する時間は人によつて一定ではない。一度にあまり長い時間をとることは疲労と非永續性を増すだけと思ふ。G. Bacon 嬢は113ミリ屈折機で西空低い太陽によつてその全貌を示された Vendelinus を15分間でスケッチし、まるい點の存在を見てゐる。一つの小さい噴火口であらう。一方、James Baikie 師の如きは、3時間近くもかゝつて太陽が東に漸く上つたところの Aristarchus や Herodotus をとつてゐる。97ミリの機械であるが、これは特殊な例である。

望遠鏡の口径は決して大を望まない。M. Luizard 氏の如きは61ミリの機械で155倍までの倍率を用ひ、Eratosthenes の變化を美事に見てゐる。フランスの雑誌に出てゐる氏の報告を讀むと如何にもたのしさうに見える。氏は結論して曰く「赤道儀もなく、運轉時計もないアマチュアの望遠鏡で十分に観測の實をあげることが出来る月面観測は特別な興味あるものである」と。熟練者である氏の倍率には無理はないと思ふ。

人類は新奇を好むものである。月面に煙をふき出してゐる山があるとて大さわざした人がをる。わづかに1回の観測ですぐ決めてしまふのが誤りの種である。A. Dos. 氏はフランスで最も熱心に月面を観測してゐる一人であるが、氏は Posidonius の内部の片隅にある小さい山を、6回のスケッチによつ

て確めてゐる、かなり微細な存在でも、6回の観測(1931年6月—10月)なら確實である。眼視観測には幻覺が伴ふことがあるから注意を要する。この點で Dos 氏の熱心さを賞したい。

Sheldon 博士は Aristoteles の中央の山の東側から東南壁の頂上に達する廣い谷が横つてゐることを見、早速この部分の観測が更に多く要求されるやうになつた。協同観測の必要はここにもある。

観測發表の型式は全スケッチを發表するのが最良であるが、一ヶ所にまとめておいて、少くとも各観測者はいつでも自由に調べて参考にし、併せて諸外國の結果を注意することにしたい、特殊の發見が確められれば堂々と發表してよい、しかし、これは數年後のことである。

## 花山よりの各観測地に滞留する主要人物

北海道 指導者 竹田助教授

第1観測隊(枝幸) 柴田淑次、荒木九臯、宮本正太郎、荒木健兒、山本英子、後藤一郎、本田 實、能田忠亮、籾内 清、竹内時男、水野千里、佐藤氏、小野原勝、村松勝造、藤田女史、入江女史、旭川師範教師1人。

他にチェク國国立ブラハ天文臺より Slouka, Hujer, Jaschek Hopal の4氏。

及び支那より南京天文臺の余青松、陳遵嫻、趙女史。

更に支那より北平大學工學院の馮簡氏。

第2観測隊(中頓別) 小山秋雄、木邊成麿、稻村賢造、河路甲午郎、前田治久、是枝正一、旭川師範教師1人。

第3観測隊(遠輕) 高城武夫、大口周作、宮森作造、山本 進、草場 修、津田雅之、垂井増太郎。

北滿洲 第4観測隊(呼瑪) 指揮者 荒木助教授、栗原道徳、上谷貞吉、公文武彦、高倉正明、千田勸太郎。

シベリヤ 第5観測隊(オムスク) 指揮者 山本教授、稻葉通義、堀井政三、濱田東一。